華厳経と捨身

平成 28 年 9 月 8 日
敏 翁

拙論『仏説大東亜戦争』の仏典上の根拠を探ってきましたが、取りあえず「華厳経」に到達しました。
その経緯と華厳経の私なりの理解を含めて、その中に現れた「捨身」表現を纏めてみました。

Ⅰ．経緯

1.1　明恵上人

昨年夏、本ホームページにも掲載した拙論「仏説東亜戦争」以来、仏教について種々考えを巡らせてきました。
論点は、拙論では「捨身」が日本民族に受け入れられた根拠として、「捨身飼虎」、「施身聞偈」の仏教説話や空海の若かりし時代の話を挙げたのですが、上記二つは「経典」の中のお話しで、空海の話も伝説です。
その為、実際に捨身を試みた実例を探していて、そして掲題の「明恵上人」にたどり着いたのです。

詳細は私のブログに掲載してありますので下記赤枠をクリックしてご覧ください。

明恵上人と捨身

そして、明恵上人の名は、近世までは現代よりも広く知られていたと思われるのですが、
それは、江戸時代まで生活の規範とされてきた、北条泰時によって制定された『御成敗式目』(貞永式目)の基本思想が明恵の考えに強く影響を受けていてそれが、庶民にまで良く知られていたからだと思われます。
因みに式目が発布されたのは明恵が没した 1232 年(貞永元年)であります。
このあたりも私のブログに掲載してあります。

明恵上人と北条泰時

1.2　華厳経の周辺散策

明恵上人は、華厳宗の中興の祖とされています。
上人の思想は華厳に限定されるものではなく、より広い立場であったと思われます。
上人は若いころ文覚上人を師としていて、神護寺に居たこともある事から、真言宗の影響も受けていて「厳密一如」を唱えてもいます。
しかし、中核となるのは華厳の教えであり、私もその基本となる「華厳経」を覗いてみる事にしたのです。
このあたりも私のブログに掲載してあります。

華厳経

この中で、⑩　木村清孝著　『華厳経』筑摩書房　1991 年発行
（以下も丸番号は、このシリーズを通してのもの)
から「入法界品」を選び、私なりの乱暴ともいえる圧縮を試みた代物もご覧頂く事が出来ます。

入法界品抄

Ⅱ．華厳経の検討から探玄記に至る

上述の検討を行っている内に、「1.2」で触れた唯一の口語全訳版である

⑧　江部鴨村（翻訳）口語全訳 華厳経 全２巻 図書刊行会発行

がどうしても見たくなり、探している中、神奈川県立図書館で見つける事が出来ました。

多分神奈川県内ではここに一部あるだけだと思います。

それで読み始めたのですが、

その文章が余りにも饒舌過ぎ、余りにも煩瑣過ぎる表現である事に耐え切れず、

注釈、解説を求めて先ず、下記の書籍に目を通しました。

⑬　玉城康四郎著　『華厳入門』春秋社発行　1992 年初版

⑭　竹村牧男著　『華厳とき何か』春秋社発行　2004 年

⑮　海音寺潮五郎著　『人生遍路　華厳経』河出書房新社発行　2003 年

初版は 1957 年　法蔵館より発行

玉城氏(1915～1999)東大・印哲卒　東大名誉教授

竹村氏(1948～)東大・印哲卒　現東洋大学長

は何れも斯界の碩学で、両書で華厳の概要は把握できます。

但し⑭による華厳思想の解説は、大学院講義を纏めたものだそうで極めて難解ですが。

また、⑬、⑭とも「入法界品」で善財童子が訪れる 53 人の善知識の内数人程度しか触れていません。

それに対して⑮は、直木賞作家(第３回直木三十五賞（1936 年上半期）を受賞)である

海音寺氏によるこなれた文で 53 善知識すべてを紹介していて読み易いものでした。

また⑮では度々注釈家の説を紹介していて、内容は後述しますが、これが大いに理解を助けました。

しかし、海音寺氏はその参考資料の名を明らかにしていません。

私は、それが⑭でも紹介されている華厳宗の第３祖「法蔵」(643 年～712 年)が著わした

『華厳経探玄記』(以下『探玄記』と略記)ではないかと思い、それも見たくなったのです。

⑯　昭和新纂　国訳大蔵経　宗典部　第 14～16 巻　東方書院発行　昭和 5～6 年

がそれに当たり、これも神奈川県立図書館から借用したものです。

⑯は、総ルビ付きですが、漢文読み下しで、⑭、⑮の助けも借りながらどうやら関係するところを

捜しだし、おぼろげながら理解する事が出来ました。

ここで、日本における華厳の始まりの時代から『探玄記』が重要な位置を占めていた事に触れたいと

思います。

⑬からの引用です。

『天平十二年（七四〇）　に大安寺に住んでいた新羅の審祥（～七四二）　が、金鍾寺の良弁

（六八九一七七三）の願いによって、金鐘寺において初めて華厳経を講義しました。

その時審祥は『探玄記』によって、『六十華厳』を講義し、満三年でその講義を修了しております。

審祥は、かって入唐して法蔵に直接教えを受けていた僧です。

次に天平十五年（七四三）　の十月十五日に、聖武天皇は盧舎那仏建立の詔勅を発行されました。 』

大仏開眼は天平勝宝四年(七五二)で、聖武太上天皇、光明皇太后、孝謙天皇が東大寺に行幸しています。

このような我国仏教史上、最大のハイライトに繋がる根本経典を原文では無いにしても、味わってみようと悪戦苦闘したのですが、これは、私にとっては多分今年最大のチャレンジになりそうに思えたので、その記念にもと写真を撮った次第です。

右の厚い 2 冊が　⑧　江部鴨村 訳　『口語全訳 華厳経』上下巻(全頁数　2364 頁)
昭和 9~10 年に発行されたものの復刻版

左の 3 冊が　⑯　昭和新纂『国訳大蔵経　宗典部』第 14.15.16 巻(全頁数　1422 頁)
昭和 5~6 年に発行されたもの、内容は『華厳経探玄記』です。

Ⅲ.『華厳経』の概要

以下理解を進めるには、『華厳経』の概要にいてある程度の知識が必要になります。

先ず⑧によれば、

『華厳經がその結構の雄大な点において他経に冠絶していることは今更繰返すまでもないことである。

今、六十華厳についてその結構の大略を述べて見よう。

華厳經を戯曲的に見ればそれは八幕八場（七處八會） から成る一篇の大戯曲と言って可い。

事實、華厳經はその構図があくまで戯曲的で、 一幕ごとに場處が変り、そこに色んな人物が上場して演舌したり、歌ったり、踊ったりして見せるのである。

その構圖の戯曲的な点では、しかし前述のやうに維摩經や法華解も同様なのだが、ただ維摩經の舞台は奄羅樹園と方丈との二處に限り、法華經のそれが耆闍堀山の一處を出でないのと違い、

華厳經の舞台は天界・地界にわたって實に八度びまで變化している。

華厳經は戯曲としてそれだけ維摩經や法華經よりも規模が大きい譯である。』

七處八會のやや詳しい解説を⑭から抽出してみました。(下記赤枠をクリック)

七処八会

この中で"↓"を付けた(印をつけたのは私)「品」は仏になる修行の道筋、即ち「菩薩道」について記されたものと言えるものです。

その当たりの解説をこれも⑭から抽出します。

菩薩道

Ⅳ.『華厳経探玄記』による「入法界品」の解釈

次に善財童子が訪れた 54 人の善知識の名前を掲げます。

①文殊師利菩薩　②功徳雲比丘　③海雲比丘　④善住比丘　⑤良医弥伽　⑥解脱長者
⑦海幢比丘　⑧休捨優婆夷　⑨毘目多羅仙人　⑩方便命婆羅門　⑪弥多羅尼童女
⑫善現比丘　⑬釈天主童子　⑭自在優婆夷　⑮甘露頂長者　⑯法宝周羅長者

⑰普眼妙香長者　⑱満足王　⑲大光王　⑳不動優婆夷　㉑随順一切衆生外道
㉒青蓮華香長者　㉓自在海師　㉔無上勝長者　㉕師子奮迅比丘尼　㉖婆須蜜多女
㉗安住長者　㉘観世音菩薩　㉙正趣菩薩　㉚大天天　㉛安住道場地神
㉜婆娑婆陀夜天　㉝甚深妙徳離垢光明夜天　㉞喜目観察衆生夜天
㉟妙徳救護衆生夜天　㊱寂静音夜天　㊲妙徳守護諸城夜天　㊳開敷樹華夜天
㊴願勇光明守護衆生夜天　㊵妙徳円満林天　㊶瞿夷（釈迦族の女）　㊷摩耶夫人
㊸天主光童女　㊹遍友童子師　㊺善知衆芸童子　㊻賢勝優婆夷　㊼堅固解脱長者
㊽妙月長者　㊾無勝軍長者　㊿尸毘最勝婆羅門　(51)徳生童子　(52)有徳童女
(53)弥勒菩薩　(54)文殊師利菩薩　(55)普賢菩薩

『探玄記』では、上記(菩薩道)でふれた菩薩修行の階梯としての十信・十住・十行・十回向・十地・等覚・妙覚　の 52 位とを関係付けています。

十住…十地にはすべて名前が付いていますが、以下の説明との関係で、十住と十地だけ名前を記します。

○「菩薩十住品」に説く十住とは、初発心住・治地住・ 修行住・ 生貴住・ 方便具足住・ 正心住・不退住・ 童真住・ 法王子住・ 灌頂住を言います。

○「十地品」に説く十地とは、歓喜地・ 離垢地・　発光地・ 燄慧地・ 離勝地・ 現前地・ 遠行地・不動地・ 善慧地・ 法雲地を言います。

そして(以下の○番号は、善知識の番号但し 50 以上は○番号がサポートされていないので( )番号表記としてあります)

①文殊菩薩により十信が成就し、②功徳雲比丘は十住の初発心住位にあたります。

以下、⑪弥多羅尼童女までが十住、次の⑫善現比丘から㉑随順一切衆生外道までが十行、次の㉒青蓮華香長者から㉛安住道場地神までが十廻向、次の㉜婆娑婆陀夜天から㊶瞿夷までが十地です。

㊶瞿夷は法雲地位にあたる事になります。

ここで、㊷摩耶夫人から(52)有徳童女までに新しい分類の考えを出しています。

即ち、①~㊶の 41 善知識の歴訪を「寄位修行相」(菩薩の階位に寄せて無修行の進展を示したもの)とし、㊷～(52)を「会縁入実相」ついで、(53)弥勒は「摂徳成因相」(54)文殊は「智照無二相」、最後の(55)普賢は「顕因広大相」の善知識とされています。

このあたり『探玄記』の原文で見てみましょう。

次の図は一頁丸ごとコピーしたもので、数字「一四六九」は、⑯第 14 巻からの通算頁、(385)は本 16 巻の頁です。

上欄に「相」の説明、本文２行目に「文殊一人は十信に寄当す」を見る事が出来ます。

【二五】十に隨文解釋するに五、一に寄位修行相、二に會緣入實相、三に攝德成因相、四に智照無二相、五に顯因廣大相、今は初なり。

【至相】至相大師智儼、華嚴宗の第二祖、本經を釋せる搜玄記の外、孔目章、五十要問答等の著あり。

【寄位修行の相】信、十住、十行、十廻向、十地の四十一位に寄せて、修行轉勝の相を明すをいふ、初に信位、文殊の敎化により入る文を釋す。善財信位に入る文を釋す。

【二六】以下三會を分つ、即ち攝比丘會、攝龍王會、攝善財會なり、今は初の釋なり。

(二五)十に文を釋せば、今至相の科に依りて此文を釋せん。初の寄位修行の相の中に就いて四十一の知識有り。內に初の文殊一人は十信の知識に寄當す、信は位を成ぜざるを以ての故に十人を辨ぜず、餘の四は位成ずるが故に各十有り。

初の中に就いて二に分つ、先に發起能化の緣を明し、後に爾時尊者承力の下は彼化事を成ずることを明す。初の中に三有り、先に主伴閣より出づるは、本に依りて末を起すことを明す。如を證せば念を離るを善安住と名け、法界數重を名けて樓閣と爲し、此正證從り後の妙智を起すを、閣從り出づと名く。同行とは智の眷屬なるが故に。文殊は是れ吉祥智を表すを以ての故に。菩薩は是れ內の眷屬、餘の力士等は外の眷屬なり。十天とは梵に提婆と云ひ、此には天と云ひ、亦神と云ふ。上の初會の中の地神河神等に同じく、竝に是れ法門の神なり、名の如く準釋すべし。此は內報離染を顯す。次に八王有り、法自在を表すこと、知んぬべし。此れ竝に文殊の威德を顯すのみ。二は俱に佛前に到る、三は敬を設けて辭し去るは、機に就いて救濟することを明すが故なり。

(二六)二に化事を成ずる中に三會有り、即ち三段と爲す。初に攝比丘會の中に二有り、初に身儀の益を明すは則ち根熟をして欲を起さしむ。二に爾時文殊告諸の下に語業攝益を明すは、則ち正に法門を授く。前の中に七有り、初に勝緣を覩、二に勝念を起し、三に勝機を攝し、四に勝境を示し、五に勝益を明し、六に勝人の所に到り、七に勝攝を蒙る。初の中に鷲子、會に向ひて盲の如し、何が故に此中に乃ち見ることを得と云ふや。釋すらく、本會を

下の図は、右から「一六〇〇」頁、「一六一一」頁、「一六二七」頁、「一六二九」頁の各々一部分を抽出したものです。
それぞれ「会縁入実の相」、「摂徳成因相」、「智照無二相」、「顕因広大相」の注釈です。

この様に法蔵は「探玄記」によって、「華厳経」の内部構造を、浅学の私が云うのも変ですが、強引と思われるほどに理路整然と再構築したのでした。

（五）第二大段に摩耶夫人の下は、會縁入實相の知識を明す。謂はく、前の諸位差別の縁を會して、平等一實の法界に歸せしめ佛果を生ずること、摩耶の佛を生めるが如き故に次に明す。此中に十人有り、之を分ちて二と爲す。初の一は是れ總、餘の九は是れ別なり。初の摩耶は智幻法門を得、末後の童子童女も亦幻住法門を得るを以て、始終相會し、總別相融じて無二なるを以ての故なり。

（一五）大段第三に彌勒の位、是れ攝徳成因相の知識とは、前に既に縁を會して實相に入り、定んで成佛するに堪ゆるが故に、一生補處成因の義を辨ず。

（一六）第四に智照無二相の知識とは、前の因法は果を生じ、體は無分別にして境智等の諸の二相を絶するを顯すが故に。初に法を擧げて修を勸むる中に、初に住を勸めて問を教ふ、位極まれるを以ての故に問を教へて普賢の行を具足せしむ。

（一七）第五に顯因廣大相の知識は、前の照理無二にして甚深を顯すを以て、方に成佛廣大の因たるに堪ゆるが故なり。中に於て三有り。初に法を擧げて修を勸め、二に教に依りて趣入し、三に正しく法界を證す。初の中に聞普賢名等とは、是れ何の處にか聞く。謂はく、前に文殊は言聲說の故に。又亦是れ前の、文殊の善財を普賢道場に置かしめらる。是故に彼に於て此名等を聞くなり。

Ⅴ．華厳経の中に現れた捨身

以上Ⅳ．を纏める中で、私なりに華厳経の全体像把握に確信らしきものが持てたので、
次に拙論「仏説大東亜戦争」の中核となる「捨身供養」が　華厳経の中で如何に取り扱われているかの検討に入る事にしました。
ここまでくると、学術論文はいざ知らず、一般書籍にはその検討の痕跡すらも見出す事が出来ず、

⑧　江部鴨村 訳　『口語全訳 華厳経』上下巻

を、その余りにも饒舌・煩瑣過ぎる表現に耐えながら(所々は飛ばしながら)通読する事としました。
そして幸いにも(？)、「捨身」を重点的に取り扱っている 125 頁に亘る長文を見付け出す事が出来たのでした。
それは、前に　Ⅲ.『華厳経』の概要　で引用した　　**(七処八会)**
で紹介した「金剛幢菩薩十廻向品第二十一」(⑧では"十"は入っていません)の中の
「第六　随順平等善根廻向」であります。
以下それぞれを場合によって「十回向品」、「善根回向」と略記します。

これでは何のことやらと思う向きも多いと思うので、簡単な説明(ウィキペディア)を加える事とします。
『**回向**（廻向、えこう）とは、
自分の修めた善行の結果が他に向って回（めぐ）らされて所期の期待を満足することをいう。
善行の報いは本来自分に還るはずだが、大乗仏教においては一切皆空であるから、報いを他に転回することが可能となる。善行の結果を人々のためになるよう期待し、それを果すのを「衆生回向」といい、善行の結果を仏果の完成に期待するならば、それを果すことは仏道への回向である。
いわば、自分自身の積み重ねた善根功徳を相手にふりむけて与えることを回向という。』
また、**十廻向**（じゅうえこう）は、
前述の菩薩修行の階梯としての十信・十住・十行・十回向・十地・等覚・妙覚　中の「十回向」に対応していて
『菩薩修行の位階である 52 位の中、第 31～40 位まで。上から入法界無量廻向・無縛無著解脱廻向・真如相廻向・等随順一切衆生廻向・随順一切堅固善根廻向・無尽功徳蔵廻向・至一切処廻向・等一切諸仏廻向・不壊一切廻向・救護衆生離衆生相廻向の 10 位。
十行を終わって更に今迄に修した自利・利他のあらゆる行を、一切衆生の為に廻施すると共に、この功徳を以って仏果に振り向けて、悟境に到達せんとする位。』(ウィキペディア)
(この中の「位」の表現は⑧と多少異なるところがあります)

5.1　第六　随順平等善根廻向

それでは、この初めの部分を下記からご覧頂きたい。　　**第六　随順平等善根廻向**
この中に「菩薩摩訶薩」という言葉が現れますが、菩薩は「覚りを求める衆生」であり、摩訶薩は「偉大な衆生」であります。
小乗仏教時代の菩薩という用語は、成道以前の釈迦の称号であったが、『般若経』(大乗仏教初期に成立)では『覚りを求める衆生』と意味が拡張され、大乗仏教の立場で覚りを求める意義を強調するために摩訶薩を付加するようになったものであります。
そして、その中の主要部分を次頁左に再掲し、またこの部分に対する『探玄記』(⑯)の注釈をその右に示します。

『もろもろの業障をはなれて清浄の業をえ、一切の布施を缺けめなく修行する――或ひは飲・食・種々 の美味・もろもろの乗物・衣服・くさぐさの妙なる華選・雑香・塗香・牀座・住處・房舎（中略)を施す。
或いは楚毒を受ける囚徒の群を見て大悲心を起こし、もろもろの庫蔵・妻子・眷属をほどこし、みづから獄裡に入って悩める衆生の身代はりとなる。
罪に因はれて刑死におもむく者を見て、みづから己が身を捨てて以彼れの命に代はる。
あるひは人の乞うあれば、皮膚・頂髪・警中の明珠・眼・耳・鼻・牙・歯・舌・頭頂・手足は云う迄もなく、身を破って血を出だして與へ、(中略)皆ことごとく与えるだろう。
『正法を求めんがために身を火坑に投じ、法を得んがための故に、身を挙げて具に無量の衆苦を受け、法の得難きが故に、よく大地、四海の国土・(中略)妻子・眷属を代償とする。
(以下略)

(三)に二に、身に依りて行を起す中に、三あり。初に略して行事を標し、二に摩訶薩如是諸善根廻向已作如是念の下は、廣く行相を顯す。三に摩訶薩以此善根廻向時の下は、行極まりて眞に契ふ。前の二は卽ち是れ、菩提衆生廻向なり。後の一は卽ち是れ實際廻向なり。又、前の二は是れ、廣大廻向、後の一は、甚深廻向なり。初の中に三有り。先に略して七十の事の、所施の物を標す。飲食從り床座に至る十、住處從り蓋に至る十二、幢從り眼に至る十三、耳從り完に至る十四、心從り瓜に至る十五、法の爲に火を投ずる從り、身を以て佛を覆ふに至る十六、身を以て一切に施す從り、悉く能く捨離するに至る七十と爲す。

上文の 3 本の赤下線部分に対応する詳細は下記赤枠をクリックすればご覧いただけます。

刑死におもむく者…
眼
法を得んがため…

その様な文が 70 アイテムについて掲載されているのです。
その中で、(法を得んがため…)が若干の視点の調整を必要としますが、拙論「仏説大東亜戦争」の考えに繋がるのではないかと思っているところです。

5.2 「十回向品」、「善根回向」の位置付け

私は、仏教学の立場から掲題の経典の位置付けをするには浅学過ぎます。
それでここでは、「華厳経」、「探玄記」の中にそれぞれが占める頁数から眺めてみる事にしました。
勿論、それぞれは原文ではなく⑧、⑯を用いて、菩薩修行の階梯に対応する十住品・十行品・十回向品・十地品と入法界品の頁数を比べて見たのです。

	華厳経	探玄記
総頁数	2364(頁)	1636(頁)
十住品	32	25
十行品	54	69
十回向品	315	151
（善根回向）	(125)	(36)
十地品	208	436
入法界品	661	215

この解析から解った事

ⅰ． 華厳経で最重要な「品」は十地品と入法界品であるとされていますが、
十回向品の頁数は十地品のそれを超えていて、十回向品も重要な位置を
占めているのではないでしょうか。

ⅱ．さらに十回向品の中に占める「善根回向」の割合は極めて高く(～40%)
善根回向も相当重要な位置を占めていると言ってよいでしょう。

ⅲ．しかし、この事実は解説書などには全く現れていませせん。
これは、問題があまりにもシビア過ぎ、この現代的対応にとまどっているのではいでしょうか。

ⅳ．探玄記では、十地品を取り扱った頁数が入法界品のそれを大幅に超えていてこれは、十地品の
内容の重要性を示していると思われますが、浅学の私にはそれが何かを示すことが出来ないのが
残念であります。

5.3 「善根回向」以外における捨身

華厳経には、上記「善根回向」以外にも 3 か所ばかり、捨身の表現が見られます。
「善根回向」は菩薩修行の位階 52 位の中第 35 位にあります。

5.3.1 「十地品」第一歓喜地 (52 位中第 41 位)

『もろもろの佛子よ、菩薩は是のごとき大悲・ 大慈に随順し、深妙の心をもって初地に住在し、
一切の物において貧借するところなく、ほとけの大智をもとめて大捨を修行する。
およそ所有するところの一切をよく施し、金・銀・摩尼… … 珍寶・装身具及び象・馬・輿・人民・
奴婢・國土・城邑・園林・遊觀・妻妾等、あらゆる所愛のものを皆な施し、頭・目・耳・鼻・手足
をさへも深く佛を重んずるが故にあへて貧惜しない。菩薩は初地において能くこのやうな大施を行ずる。

5.3.2 「入法界品」瞿夷夫人 (52 位中第 50 位)

瞿夷夫人は前世、離垢妙徳という娘であって、釈迦牟尼仏は前世妙徳樹須弥山という王都の太子で
あった時、娘は太子を見初め、母の善現が太子に娘の素晴らしさを訴えたのに対する
太子の答えの中に捨身が現れます。

そのとき太子が答へていふ『善女よ、自分はすでに阿耨多羅三藐三菩提心をおこして、無量の劫に菩薩
の行を行じ、あらゆる功德と智慧とを積習し、あらゆる諸波羅蜜を淨修し、あらゆる諸佛を恭敬し供養し、
正法を護持し、あらゆる諸佛の世界を嚴淨し、如來の種性をして相續して斷えざらしめ、衆生を教化して
生死の苦を減し、究竟の樂に住せしめようと欲し、衆生をして智慧の眼を淨め、菩薩の道に住し、菩薩の
行を修め、あらゆる、菩薩の諸地を具足せしめようと欲し、一切衆生をして大歡喜を得しめようと欲する。
それゆえに自分は未來の果てまで布施波羅蜜を行じ、一切の國城妻子、肢節手足、頭目髓腦を捨て、家に
在っては布施し、家を出でては道を修めるだらう。 かやうな自分にたいして、御身は障礙を設けて自分の
道心を壞つて,はならない。

『時に太子が重ねてこの娘のために偈文を說いていふ。
「衆生を哀感するがゆえに、自分は菩提心をおこし、無量無数劫に、智慧と功德とを積集するだらう。
無量劫の海のうちに、もろもろの大願を修習し、ひろく菩薩の行を修め、一切の諸地を具足するだらう。

三世の諸佛のみもとに於いて、六波羅蜜をまなび、法を聞いてよく修行し、もつぱら菩薩の道をもとめ、十方の垢濁の國土を、自分はことごとく嚴淨ならしめ、もろもろの群生の、三惡道の苦患を除滅し、もろもろの方便力をもって、廣く一切の衆生を度し、愚痴の闇を除滅して、一切智道に住せしめるだらう。諸佛の海を供養し、一切地を淨修し、大慈悲を發起して、内・外一切のものを捨てるだらう。もし自分が來り求めるものに、妻子や眷屬や、在家および出家を施すであらう場合、御身はその妨げをせぬことを誓ひうるか。 もし誓ひ得るなら自分は御身を納受するだらう。」

この話の詳細は、

⑫　大角　修著　『善財童子の旅』現代語訳「華厳経・入法界品」

からの引用　**「 ゴーパー」**　を参照願います。

ここに現れる「ゴーパー」は「瞿夷夫人」と同一人物であり、話のディティルは⑧と⑫で微妙に異なりますが。

この中の対応する部分を抽出します。

『その母が語るには、この娘は蓮の花の中に生まれた化生のもので、
どこにも嫁いだことはないということでした。
心身ともに清らかで、もし太子の妃となるなら、
それにふさわしい娘でした。
しかし太子には決意していることがあったので、このように告げました。
「私はすでに無上菩提を求める心をおこし、菩薩行を修したい。
国も王宮も妻子も捨てて、世の人びとのために修行したい。
もし家を出るとき、美しき娘よ、あなたが障碍にならないだろうか」』

ここでは、原文にある強烈な表現が全く薄められています。

この話は有名なので、⑮　海音寺潮五郎著　『人生遍路　華厳経』にも⑫より詳しい形で書かれています。

これも対応する部分を抽出してみます。

『時に、母善現も和して歌う。
ねがわくば太子よ。この娘の生れにしより、いま育つに至れるまでの、
その因縁を聴きたまえ。

娘はその生れにし日、蓮華よりしで生れ来りぬ。
……
あらゆる婦徳を積んで、通ぜざるなく達せざるなきに至りし経緯を歌った。

太子は応える。
なべての者を哀むが故に、われ菩提の心を発し、
限りなき劫の間かけて、徳を積み集めなん。
量りなくはるかなる劫に、大いなる願みたして、

広く菩薩の行を修め、一切地をそなえなん。
三つの世のみ仏の所にして、六度の行まなび、
み法を聞きひらきて、もはら菩薩道を求めなん。
十方の穢れし刹(くに)を、かざなべて浄らに厳り、
あまねく群生の、悪道の苦を滅ぼさなん。
諸々の方便力もて、広く一 切の衆を度し、
愚かさの闇を除きて、一切智に住せしめなん。
諸仏の海を供養し、一切の菩薩地を修め、
来り求むるあらば、妻子すらだに捨てて、
施して悔いじ、なんじ礙ぐるなかれ。
もしこれに適わば、われ娶らんと欲う。』

江部が⑧の初めにある「凡例」の中で原文(漢文)は偈頌が多いが、韻文態への
移植は諦め散文態にとどめたとしているのに対し、
表現の雰囲気は、海音寺による上記⑮が原文に近いのかも知れません。

しかし、ここでも原文にある強烈な表現が全く薄められています。

これは、上記 **5.2** の中の「この解析から解った事」のⅲ項と同じ現象の現れと思えます。

3.3.3「入法界品」最後に会う普賢菩薩(52 位中第 52 位　明覚　最高位)

このあたりは、1.2　華厳経　の中でふれた
入法界品　　の中にあるものの対応部分を抽出します。

[十三]究極の菩薩の境地の体験

そのとき、普賢菩薩が善財に告げていった。 「君よ。 おまえはいま、私の自在な神力によつで起こされた不思議な出来事を見たか」。

（善財が）答えた。 「はい その通りです。 見ました。 この不思議なことは、ただ仏を除いては誰もことのできる者はおりません」。

（普賢菩薩が説いていう。） 「君よ。 私は過去の無数の世界の微塵（の数） に等しい劫において菩薩の行を修め、ひたすらさとりを求めてきた。（すなわち、私は） 一一の劫の間に、無数の世界の微塵（の数） に等しい仏を見てさとりへの心を起こし、一一の劫の間に、一切の世界で無数の広大な施与の会を設けてあらゆるものを、 例えば、妻子や町や村、あるいは頭・ 目・ 髄・脳・手足・血・肉など身体のすべてを施して、命を惜しまず、 ひとすじに（仏の） 完全な智慧を求め、一一の劫において、無数の世界の微塵（の数） に等しい仏を敬い供養し、その仏のもとで出家し、道を学び、正しい教えを受けて、これまで、貪り・怒り・無知の心、「われ」「わがもの」を立てる心、生死に執われるいつわりの心、他者を軽んずる心、(および） さまざまの障害となる心を起こしたことがなく、壊れることのない仏のさとりの心を修めていまだかって失ったことがない。

5.4　纏め

1．華厳経「金剛幢菩薩回向品第二十一」の中に捨身を主題としている
　「第六　随順平等善根廻向」125 頁に亘る長文を見つけ出しました。
　これは、菩薩修行の位階 52 位の中第 35 位にあたります。

2．これは、華厳経の頁数解析により、華厳経の中で重要な位置を占めているらしい事が分かりました。

3．また短文ではありますが、「位階」でより上位に当たる第 41 位、第 50 位、最高位にも捨身の表現を見る事が出来ました。

4．以上から華厳経の中で「捨身」は重要なテーマとされていた事が分かります。

5. これで拙論「仏説大東亜戦争」の大乗仏典上の根拠をここに見出す事が出来た様に思えます。

6. ただ「捨身」は現代的な価値観からは極めて異質な考えであるので
　近年の解説書などでは触れるのを避けている様に思われるのが残念であります。

Ⅵ. 終わりに

昨年夏、拙論「仏説大東亜戦争」を纏めて以来、そのより確かな根拠を求めてきましたが、
ようやく「華厳経」の中にそれを見つけ出したという実感を持つことが出来ました。
思えば、明恵上人、北条泰時、「華厳経」、「探玄記」と長い知的活動の旅でした。
しかしここまで来て、また新しい問題意識も出て来ております。
例えば、「探玄記」の中には、「華厳経」に入っている「捨身」布施の原本らしい、仏典の名が多数引用されています。
釈迦出現時、またはそれより更に遡るインド民族の神話の中にこの原型があるのではないかと思われます。
始めたら止まらない私です。
印度哲学と仏教学の碩学中村元先生による
中村元選集(決定版　全 32 巻別巻 11 巻)という膨大な資料の存在を知り、それをベースに更なる探求を始めております。
それについては近いうちにまたお話しできるのではないかと思っているところです。

完